第七場面について考えて書こう。

・時間の経化。
・場所と様子。
・出来事。

一週間後兵十は、中山様や、弥助、新兵衛、加助など大ぜいの人に集まってもらいごんのそう式をしました。そう式が終わってから、し毎日毎日、兵十はごんにうなぎや、いわし、くりや松たけをごんの家の前に水やくりを火なわじゅうでうってしまった場所におそなえをしました。ばれないようにこっそりとやっていましたが、ごんのことをぬすっとぎつねめと読んでいたり、ごんのこと加助などに言っていたのでうそをついたみたいだからです。そして一ケ月がたちました。まだ兵十は続けていました。ある日、加助が「どうして毎日兵十の家の前に水やくりが置いてあるんだれが置いてるんだろうな。」「本当だよ。だれが置いてるんだろうな。」

と会話が続きました。そして、夜になりました。松虫が鳴いています。チンチロリン、チンチロリン。夜が明けました。いつも通り兵十は、山へくりを拾いに行きました。水を土で使ったコップの中にいれました。そしてくりをならべていると後ろから加助が、

「兵十お前だったのか水やくりを置いてたのは。」

兵十はびっくりしてあわててかくしました。

「ちがうよ。じゃまだったからどかそうとしてたところだったんだよ。」

「うそだ。」

「どうしてうそだと思うの。」

「おれは、朝からずっと兵十のことをおいかけていたんだよ。そのくりを拾ったところもしっかりと。」

とうとう兵十が置いていたのが加助にばれてしまいました。兵十はそっとその場から立ちました。今も、おっかあが死んでしまったときと同じ悲しい顔をしていました。ばれてしまっても兵十は、ごんのおそなえをしっかりやり続けました。